

文化女子大家政 ○飯塚弘子、鈴木正文、香川幸子、盛田真千子、万江八重子、下地一丸

目的 「色彩“青”についての研究」をしたところ、色の連想は普遍的性格が強い反面、時代、個人によって違いがあること、文献上での色の取り扱い方は色相名だけで、明度、彩度に関する詳細のないものが多いことなどが、その折認識された。そこで、今回は文献から色の連想用語を取り出し、12色相及び無彩色について連想用語を分類し、さらに三属性との関連をみる目的のために実際の色との照合を試みた。本年は赤、黄、緑、紫の4色相について調査を行なった。

方法 文献37冊の中から色の連想用語を抽出し、カードに書き出したのちKJ法により分類をした。その中から調査用語を選定し次の条件で調査をした。①調査期日：1981年4月。②被調査者：本大学1年生。1色相1クラス。③調査法：集合調査法による多項選択法、自由記入法の併用。④調査用語の数：赤120語、黄109語、緑108語、紫109語 ⑤提示色：1色相9 tone。⑥紙質：半艶アート紙。⑦提示時間：2分30秒。

結果 個人によって連想用語数に大きな違いがみられ、各色相の平均は赤9.1語、黄14.3語、緑13.1語、紫14.5語である。自由記入の語は約2~3割の学生があげており、1人1~2語が多く、記入された語は調査用語と類似した語が多かった。各色相とも調査用語すべてに反応がみられたが、語によって反応値に開きがあった。そこで、被調査者の30%を基準値としそれ以上の語について考察を行った。①語の数の多さは必ずしもvivid toneではない。②語によって数toneにわたり反応がみられた。③同色相の中で意味の反対の語などがみられるが、これらは明度、彩度との関連により反応した。